

戦後の農業の流れ

川 窪 清 一

福生のつち

農村としての長い歴史を持ち、明治・大正以来、養蚕の盛んな地帯として広く知られた福生のこの地にも、首都圏の拡大とともに人口が増え続け、住宅建設も急速に伸びた結果、農業は縮小されて市街化が進み、田園風景は失われて高層住宅が建ち並ぶなど、今や福生は、住宅商業都市としての発展を続けております。

福生の農業は、地形地質から、三つに大別できると思います。

火山灰土で覆われ、春先には、赤い土埃りを舞い上げていた武蔵野（はげ上）と、江戸末期から水田が作られ、明治四十年頃までは、多摩川の大洪水にあつて流失したこともある砂質の河原（現在の南北田園）と、その中間で、土の色も黒く、最も早くから耕作されたと考えられるとともに、住宅地にも早く変つた中段地帯の三つであります。

戦後の農業

また戦後の農業の流れをみると、昭和三十年頃を境にして、二つに分けることもできると思います。

農家の人ばかりでなく、勤め人も商人もが、少しの土地にも食糧を作つた時代と、その後の、都市化、兼業化の進んだ時代とで、とくに若い人たちがサラリーマン生活を希望しだし、貸家による収入の道が盛んになってきた三十年代からは、福生の農業も大きく変つてきています。

昭和二十年八月十五日の終戦前後は、すべてのものが不足という言葉以上でありました。

食糧はもちろんで、あかぎ、せり、なづな等の野草をつんで食べる状態でしたので、戦前まで農業の中心であつた養蚕もやめ、桑園は桑の木を抜いてさつまいもや、かぼちゃ、米麦などが作られました。

食糧は供出が行われ、また、奪うように買われて行く状態で、「買い出し」という言葉がさかんに使われました。

その頃の数年間は、肥料も道具も配給で、充分ではなかったが、食糧の増産増産の時代でした。

しかし、こうした苦しい時代にも、武蔵野の麦畑からは雲雀が舞い上り、水田には、れんげの



昭和初期の農作業姿

ていき、また、使う人々も機械になれて、今まで、牛や馬で耕されていた田畑へ耕耘機が使われるようになりました。その頃のある日、中福生下の田を耕していた機械が故障してしまつた。ちょうどその時、百米位先の田に、二人のお百姓が馬を引いて耕しに来ました。

馬は耕す道具の犁すきを付けた頃から暴

花が咲き、野道のたんぼぼ、菜の花畑のモンシロチョウ、モンキチョウの舞う姿などは、敗戦に打ちひしがれた人びとの心を慰めてくれました。

昭和二十八・九年頃までは、農業は、食糧自給・食糧増産が国の方針で、農家自体も迷う必要のない気持ちであつたと思います。

農産物品評会が秋に行われて、米麦、馬鈴薯、野菜の良い品を多く収穫した人が表彰されました。

農家の人びとが、食糧を立派に作ることは、全ての人が幸福に生きられることと考えられ、尊い職業とされていきました。

農機具の普及

終戦を迎えると、戦時中の軍需工場は平和産業に転換し、農機具を研究して、農業用機械が生産されました。

昭島市でタマ川式脱穀機、立川市の伏虎式縄ない機などと、軍用の残材料を使用して作られた機械が、リヤカーや牛車で運ばれ、農家へ急速に普及しました。

これらの動力源には、主にモーターが使われましたが、電力事情が悪くて、一〇〇ボルトの電気が八十ボルト、ひどい所は六十ボルトということもあつて、モーターは力が無く故障も随分起

りました。

機械がよく動かないので、電力会社の人に調べてもらった後、夕食にうどんを出したら、電灯が暗くてそばと間違つたなどという話も聞かれました。

当時は、一般に機械への知識が無かつたので、停電なのに、モーターが故障だと言つたりしたことなどありました。

しかし、段々と農業に使う機械が改良され、新しい機械が作られる一方、電気事情も良くなつていき、また、使う人々も機械になれて、今まで、牛や馬で耕されていた田畑へ耕耘機が使われるようになりました。

その頃のある日、中福生下の田を耕していた機械が故障してしまつた。

ちょうどその時、百米位先の田に、二人のお百姓が馬を引いて耕しに来ました。

馬は耕す道具の犁すきを付けた頃から暴

れはじめ、とうとう犁を引いたまま駆け出してしまった。犁は飛びはねる、それに驚いて馬はさらに走り廻る。周囲の人びとは逃げ走りまわりました。

この様子を見ていたおばあさんが、

「機械は故障するし、馬だと暴れるし……」と言いました。

人と機械とは、こうしたいろいろな戸惑いや笑いを起しながらも、機械化が進んでいきました。

兼業農家

しかし、この頃から一方では、農家の若い人たちのサラリーマンになる人が増え出し、日曜百姓、あるいは三チャン農業と言われる家が年ごとに増えてきました。

中でも、昭和二十五年に起った朝鮮事変の頃からの米軍人ハウスの建築や、都市計画によって農地の宅地化が行われ出し、昭和三十七年より始められた加美平武蔵野台區画整理事業は、兼業農家の増加の速度を早め、畑作の陸稲、麦類を作る家と面積は急減しました。

その反面、家畜を飼う農家は多くなりましたが、これは、国の動物性食糧の増加方針が称えられたことと一致していたのだと思います。

昭和四十四年になると、市内に唯一つ残されていた水田地帯の區画整理事業も開始され、田んぼは次々と埋め立てられて、住宅商業都市としての発展に向ってさらに進んでいきました。

減って行く農家

昭和五十年になると、専業農家二軒、兼業農家二五九軒になり、畑に作られる作物は、大部分が自家消費のためのさつまいも、馬鈴薯、里芋、大根、人参、ねぎ、なす、きゅうり、キャベツ、菜類などで、野菜の栽培戸数は、昭和三十三年頃とたいして変わらないが、栽培面積は非常に少なくなっております。

家畜の飼育も、昭和三十七・八・九年を最高にして漸減し、現在は牛豚とも数軒で飼われているのみとなりました。

馬や山羊、羊などは、子供たちが学習のために観察するということもできなくなってしまいました。

近年、緑の保護、自然の保護が称えられ、あるいは災害時避難場所として、農地が見直されています。また植木栽培も行われ出しました。

しかし、遠い昔から、農家の人びとが、武蔵野原や多摩川原の荒地を開墾して耕地を作り、養蚕や蚕種製造の先進地として誉美された苦労や、稲作に、あるいは麦はじめ畑作物の栽培に、その時代、時代の耕作法を拓いた努力など、郷土発展の基礎となってきた農業は、今や、未来の福

生市発展の中に埋もれつつあります。

田んぼに稲束を干す風景、

リヤカーに桑を積んで引く母と娘、

これらは、過ぎ去った福生の姿であります。

蛍とぶ夏の夜の風情、

蛙の声を聞いた庭の夕涼み等、

農村時代への尽きぬ懐古の中に「ふるさとふっさ」の農業をつづつてみました。

消え去るか？ 福生の農業

神 田 公 司

太平洋戦争が終った頃の福生市は、まだ農業が盛んに行われていました。集落も熊川の南から加美の羽村境までの奥多摩街道沿いが大部分で、青梅線の北側には原ヶ谷戸部落があるだけでした。また商店街は、福生駅前と銀座通りのごく一部に町らしさをかたちづくっていました。

こんな具合で、市のほとんどは畑とたんぼでした。今では想像もつかないことですが、福生駅と牛浜駅の間は畑が続き、青梅線と国道十六号線（基地前の国道で昔は日光街道と呼んでいた）の間も、人家はほとんどなく畑でした。今、公団住宅が建ったり区画整理された多摩川沿いは、全部たんぼで約四十ヘクタールほどありました。

終戦から三十年の間に、福生の農業は大きく変わりました。変わったというより無くなったといえましょう。私は昭和三十三年から十年ほど、農業改良普及員として福生市にお世話になった経験から、私なりにこの三十年間の福生市農業の歩みを紹介したいと思います。

先ず昭和二十年代ですが、私はまだ福生の担当ではございませんでしたが、職業がら当時の状況も多少はわかっておりましたので、記憶をたどりながら記すことにいたします。

二十年代の前半は日本中が食糧不足でした。そのため、農家以外の家でも、庭などは畑に変わった時代です。福生の農家の皆さんも、食糧増産に励みました。畑では、大麦・小麦・陸稲（おかば）・さつまいも・じゃがいもなどが栽培され、たんぼはもちろん、稲が作られ、秋から春にかけてはたんぼにも、大麦や小麦が作られました。この時代は食糧だけでなく、他のあらゆる品物が不足していましたので、農業に使う肥料などは、作付面積に応じて配給されたものです。もちろん、本当にたくさんの収穫を上げる量のまぐらいしか、配給されませんでした。それでもその頃は、国になかば強制的に売渡す供出制度というものがあり、どうしてもたくさん収穫しなければ

ばなりませんでした。農家では、その足りない肥料を補うために、冬は秋川市や八王子市の山に
出かけ、落葉集めをしてそれを堆肥にして使ったり、下肥(しもこえ)といって、尿尿は全部肥料
に使ったものです。

この頃の福生の農業で、とくに記しておきたいことがあります。それは戦後米軍が横田基地に
入り、福生は文字通り基地の町となったことです。これが農業にも少なからず影響がありまし
た。それは、米軍人やその家族の住む家が建てられたことです。畑をつぶしそこにハウスと称す
る米人向けの貸家を建てますと、日本人の貸家よりはるかに高い家賃収入があったわけです。そ
のためたくさん農家がこのハウスを持つようになりました。そして畑も大分つぶれたわけ
です。もう一つは基地労働者が増えたことです。この基地従業員には町の農業労力も多分に流れ込
んで行きました。そして兼業農家が増え始め、そのうち俗にいう日曜百姓の誕生となりました。

二十年代も後半になりますと、いろいろの物資も出まわるようになり、農業関係でも肥料や農
業が思うように手に入りはじめました。畜産の方もだんだん盛んになり、永田、牛浜、鍋ヶ谷
戸、内出といった所には、乳牛や豚をたくさん飼う農家が出てきました。

またここで特筆したいことは、農業用の小型機械が普及しはじめたことです。今までは田畑を
耕すには、役牛や馬を使っていましたが、アメリカから導入されたティラーという小型耕耘機
を、日本の農業に合うように改良したものが、馬や牛に替って普及してきました。

さて昭和三十年代ですが、この十数カ年は日本の農業の動乱期とでもいましょうか、大変な
時代であったと思います。いよいよ日本も戦後の復興が一段落し、工業立国を目指してダッシュ
がはじまりました。こうなりますと、食糧も輸入が増加し、国内産と両方でどうやら間に合うよ
うになってきました。そして今まで食糧増産一方の農業も、自ら経営の転換をせまられること
になってきました。

すなわち、急激な工業の発展に比べ、農業は増産に追いまくられて、復興に大きな役割は果し
たものの、その見返りは他の産業に比べるとあまりに少なかったのです。農業と他産業との所得
の格差はこのあたりから開き始め、その差は徐々に大きくなって行きました。福生の農業も、こ
の大きな流れの中に巻き込まれていったのは当然でした。

そして一方では、そろそろ土地ブームの風が吹き始めてまいりました。首都圏の急激な人口の
増加と、工場進出などがその原因でしょう。ある人は所得の低い農業から、この土地ブームに乗
り、転業を試みたり、兼業農家になったりしましたが、またある人は、農業の自立経営を目標
に、家畜の数をふやしたり、主要食糧(米や麦)生産から多少でも割の良い野菜生産へと経営を切
替えてまいりました。しかし転換を図っても、急に良くなるものではありません。この頃から
「農業の曲り角」という言葉が聞かれるようになり、国でも農林省がいろいろ政策を打出しまし
たが、福生のような都市近郊農業には、あまり恩恵はありませんでした。

こうした中で、ただ一つ福生の農業にも大きな動きがありました。それは国・都・町（当時は福生町でした）がそれぞれの割合で、補助金を出して、農業のテコ入れをする事業です。新農村建設事業といいますが、福生で事業が実施されたのは三十五・六年のことと記憶しています。補助の対象として行われた事業は、永田の農家数人による共同養豚と、やはり永田の養魚池、現在市役所の一部に使われている生活改善センターなどです。

こうした中で農地の宅地化はどんどん進み、終戦当時の半分以下に減っていたと思います。今の熊川団地とその付近も、全部畑でしたが、熊川団地建設の話が聞かれるようになったのは、三十年代の終り頃だったと思います。

話を元に戻して、この年代の福生の農家は、どんなものを生産していたかを紹介します。前にも述べましたが、主食の方がどうやら足りてきましたので、こんどは、野菜を作ったり、牛乳や豚肉、卵などの畜産物を作る方に替って行きました。まず野菜の方ですが、きゅうり、とまと、なす、ピーマンなど夏にできる野菜と、秋から春にかけては、大根、白菜、ほうれんそう、小松菜といったものです。そして、今でも牛浜にあります。野菜市場に出荷して、皆さんに新鮮な野菜を供給していました。この野菜を作る人たちは、よい野菜をたくさん作り出すために緑興会りよくこうかいという研究会をつくり、野菜の勉強をしたり、お互に技術を教え合ったりして、活発な活動をしました。また畜産の方は、とくに乳牛がたくさん飼われました。乳牛の人たちも酪農組合

をつくり、皆、一生懸命研究をしました。その頃は、搾った牛乳を集める所が長沢にありまして。豚も鶏も同じように組合があつたわけです。

一方たんぼではまだ稲が盛んに作られ、新しい技術や機械がとり入れられていました。早期栽培といつて、早生の稲を早く植えて、早く収穫する方法です。もちろん新しい品種を取り入れていました。この方法は、今までのものより多少手はかかりますが、品質のよい米がたくさん穫れたものです。また福生のたんぼは、多摩川べりにまとまっていたので、病気や害虫の防除は、共同作業でいっせいにやることができました。農協や市役所（当時は町役場）の産業課や農業改良普及所で打合せをし、最も有効な時期を見定めて、いっせいに防除をしました。

このように三十年代は、日本の農業も福生の農業も大変な変わりようをしました。やはり他の産業との開きは、大きくなるばかりでした。

四十年代に入ってから、畑は減り続けていました。もうこの頃は、家と家の間に畑があると、いくらいらなくなって来ました。そのため、野菜を作る畑がなくなり、秋や冬の野菜をたんぼで作る農家もありました。人口がふえてきたので、家畜を飼うのも無理になり、乳牛や豚、鶏も急に減って来ました。それでも、たんぼはまだ稲が一杯に作られ、とくに四十年には、福生の稲作にとって大きな変化がありました。稲は苗代で苗を育て、人が手で苗を植付けるものでしたが、これは機械で田植えをしようというもので、いわゆる田植機です。この機械は、特殊な方法

で苗を育て、機械にセットして代かきをした田に、植つけるものです。この田植機を最初に使ったのは、志茂の川窪清一さんでした。そして結果がよかったので、たちまちこの方法が広まり、福生のたんぼの半分以上が機械田植にかわってしまいました。

四十年代も中頃までは、少なくなりながらも農業が続けられていましたが、人口の増加と農業環境の悪化、それに若い労力の不足、割りに合わない農業など、条件がきわめて悪くなってきた、ついにたんぼの方にまで市街化の手が伸びてまいりました。すなわち福生の水田の区画整理事業です。四十二年とありますが、この話が始まり、町と耕作者の人たちで、説明会や協議が何回となく繰り返えされ、区画整理事業が完成し、現在のような新しい街に変わりつつあるわけです。

こうして戦後の農業は、いくつもの曲り角を曲がりながら、一曲りするごとに小さくなり、とうとう福生市から、その姿を消そうとしています。最近になり、緑地を保全しなければ、人間社会にいろいろな都合が悪いといわれはじめました。そして、都市農業などという新しい言葉も、聞かれています。「狭い所に大勢の人が住むにも、一定の空間が必要である。その空間を農用地に求め、災害などの場合は、そこを利用する。」などという構想もあるようですが、はたして、そんな都合のいいように、農業が利用できるでしょうか。作物は畑があつて種を播き、肥料をやればできる。そんな簡単なものではありません。

福生の農業は、戦後三十年で消え去ろうとしています。幸いに福生にはまだまだ空間が残されています。新しい街づくりに、最も有効に利用していただきたいと願うものです。あの水田の区画整理された中でも、今なお農業は続けられています。

淡い記憶をたどりながら、福生市農業の三十年をふりかえり、私なりにまとめてみましたが、これはほんの一部かも知れません。しかし、大きく発展する福生市の歴史の、ほんの一部にでもなれば、まことに幸いと存じます。

(東京都農業改良普及員)

農家のこども

成 田 和 子

こどもの頃の思い出を綴る時、福生の農村時代の姿が浮かび上ってくる。

静けさと、貧しさと、こころの触れ合いの中に昭和十年前後の農家の姿があり、こどもの生活があつた。

夕立ちであった。綿の着物が、びしょびしょに濡れていた。桑摘みから帰ってきた母は、土間に這入ってきて祖母と話すと、そのまま蚕室の方へ行ってしまった。

「おかあちゃんたちは大丈夫かなあ……」と、長い間待っていたのに、私はその時母に何か言っただろうか？



筆者の少女期・父と農作業に

言葉は何も覚えていない。ただ、雷の音の中で待っていた不安な気持ちと、帰ってきた時の母のおいだけが残っている。

汗と桑の香の入り混った、母のおいだけが残っている。

お茶運び

やかんのお茶をこぼさないように歩いた。

畑や田んぼへのお茶運びが、子供の頃の仕事のひとつだった。

ふるしきに包んだザルの中には祖母の作ったやきもちと、

きゅうりの漬物がいっていた。

はげ上の畑にいる父の所へ、足早に歩いていった。かんかん照りの道が暑く、さびしかった。

洋服

洋服（校服）がきまったのは、小学校二、三年の時だった。

タバコ屋のおじさんが、ふるしきに入れて持ってきたのを買ってもらった。

白い丸衿のブラウスに、紺のジャンパーズスカート（綿サージ）だった。

着物で入学した私が、洋服になったのがこの時だった。近所の友だちもみんな買ってもらった。

はじめて着てみた時、金持ちのこどもになったような気がした。嬉しい夏だった。

二段べんとう

麦の多いごはんを食べていた。白米は特別な日だけだった。

雪の日か何かで、おべんとうを作ってもらった。姉は、兄のべんとうのために炊いた米のごはんの残りを麦飯の上のせて二段べんとうを作ってくれた。

蓋をあけた時、まっ白いごはんが嬉しかった。

アスファルトの道

道端でよく遊んだ。

車といえば、五王バスが一日に何回か通っただけだったので、道は遊び場になっていた。

駐在所の前の道はアスファルトだったから、午後になるとみんなが集まってきて、いろんな話をしたり遊びをした。

ジャンケンでパーが十歩、グーが八歩、チョキが五歩進む競争はよくやった。チリケン（ジャンケン）ゆうぎもやっていた。

子守りに来ていたのよちゃんや幸恵さんの所のあきちゃんも一緒だった。大きい人も小さい者もいっしょになって遊んでいた。

毛糸やリアンの編み方も、みんなに教えてもらった。

「オットセイいいか」

「オットセイいいかークジラいいよー。」という遊びは、何人かで組んでやったが、中福生の端から端の方までを隠れたり見付け歩いたりしていた。

スマちゃんの家の蔵の二階にかくれた時だった。手が、ヒヤッとしたものに触れ、「蛇だ！」と思った時の恐ろしさ、うす暗い土蔵の中の怖さと一緒に今でもこころに残っている。

学芸会

蔵の軒下や座敷で、学芸会のまねをよくやった。「桜井の別れ」は、死んだ妹との思い出だ。学芸会の日、ほかの学年の人たちが見せてくれたこの劇は、当時二年生だった私のこころを強く打った。

かなしい別れの場面がすきで、妹を相手に何度もまねをした。正成が私、正行が妹の役だった。母のものさしを刀にし、踏み台を腰かけにして、歌ったり演じたりしていた。

友だちとは、自分が出たものから他の学年のものまで、いろいろ真似をした。遊びの中でも、練習があったり本番があったり、そして時には途中でけんかになって泣いたりもした。

学芸会が終わった後は、しばらく劇やおどりのまねごとが続いていた。

あれから四十年、スマちゃんやトシちゃんとシャクトリ虫を取りに行った桑畑はなくなってしまった。久代さんとシジミを見つけたクルマ堀りも遊歩道の下になり見られなくなった。

戦争があり戦後があった中で、田畑は変わり、人の生活も変わった。

歴史という深い流れの中で、福生の姿は大きく変っている。
―ひとが生きる―それは美しくかなしいことだとおもう。

主婦として女として

―戦後三十年―

野 沢 翡翠 佐 土

はじめから私事に涉って恐縮ですが、私は、昭和二十年四月、長野県の片田舎の小さな町の小学校の分校に入學しました。

その年の八月十五日、縁側に出したラジオから聞こえる聴きとりずらい玉音放送に姉たちが泣いていたのを、一種異様な不思議な思いで、みていたのを記憶しています。

今度、この原稿を書くことになって、戦前から福生に住んでおられた方や、戦後すぐ福生にいられたお母さん方に話を伺う機会をもって、まず、このことを思い起こしました。私のもつ空襲といつても、サイレンが、一、二回鳴るだけ、食糧難といつても、米がなくなるわけではありませんでした。

十四年前、運命の糸にたぐられて、はじめて福生に来たときの一種異様な混沌とした感慨が、今回のお話を伺ったものをつづることによって、幾分かでも、私と同様に他所から来た人たち

に、共有されることができたらと思います。

ただ、はじめからおことわりしておかなくてはいけないのですが、これは、あくまでも、今、五十才前後の主婦の皆さん他からお聞きした話を、私Ⅱ男というフィルターを通して、記述したものです。それに、時間他の制約もあって、八名の方々のお話を伺ったにすぎません。

したがって、私の誤解もあるかもしれません。その意味では、これをもとに、さらに、より正確なもの、普遍性をもつものが生まれることを願っています。その辺はこの本の他のところにも出てきていることと思います。

また、お話くださったことがらなどについての責任は、すべて筆者にあります。また、いろいろお教えいただきたいと思っています。

他所から来てみた福生

戦中から戦後すぐにかけて（昭和十七年と昭和二十三年頃）福生に結婚などによって移ってきた主婦にとって、「福生というところは、貧しいところ、何もないところ」という印象がある。

今日の姿から予想できないが、「栄通里には、牛浜まで数えるほどしか家がなかった」し、「一面の桑畑」だった。何もないところという印象は、産業上からもある。「片倉製糸」以外は、養蚕中心で、畑作も、大麦・小麦が中心だったという。

福生市の戦後の人口は、昭和二十年で、九、九一八人であったものが、三年後、二〇、三四五人となり、二倍を越す。これも、二年間続くだけで、二十五年には、一四、六六九人となり、その後、十年たった昭和三十五年になって、二万人を越すことになる。そして、昭和四十一年、三万人台に、四十八年に、四万人台になる。

「また、産業別就業者数をみると、昭和二十五年当時は、現在一％台である第一次産業従事者が、まだ一五％ほどおり、第二次産業（建設・製造業）関係者が、今より一〇％ほど少ない状況を示している。

したがって、終戦直後には、まだかなりの人々が農業中心の生活を送っていたこともあり、「ずっと畑だった」様子もわかる。

職業構成上の福生の特色に、サービス業がある。

卸・小売等の商店関係を除くサービス業は、昭和二十五年で、二一・七七％、昭和三十年当時の三五％を頂点に徐々に下降して、現在、二〇・七六％となっている。

これらのことは、後にも述べるように福生を特徴づける一つの要素として、福生に住みはじめた人々の意識の中にとらえられているのである。

また、転入者の従前の居住地をみると、全国各都道府県から人が集まっており、昭和四十九年度でみると、転入者が人口の一三・四％、転出者は九・二％である。この転入者のうち、七五％

は都内各区市からであるが、他の二五％は関東各県からや北海道の〇・八％、沖縄の〇・一四％まで全国にまたがっている。

これらの状況も、福生に来て感じた「混沌とした感じ」の一部を構成するのであろう。

終戦のころ

終戦の時、どう感じたかという点では、それぞれの人の話は、まちまちである。

「会う人と話もしたくない」「本当に敗けたのか」と半信半疑であった人、「敗けるということとは、どういうことなのか、国がなくなってしまうのか」「自分たちは純粹だったのか、馬鹿だったのか」等と考えはじめた人。

ただ、はじめの頃は、戦争が終わったのだという実感が湧かなかったという。

少したつと、さあ、これから、どうすればよいのだろうかということとともに、たとえば、外人が乗り込んでくるから逃げなくては、といった話も真剣に考えられた時期もあった。

このような中で、主婦の関心は、当然衣食が中心となる。

配給は、かたよってくるが多かった、たとえば、サラメが石油かん一杯に来たとか。タピヤゲタは自分で作ったし、マキは、とりに行った。ランドセルもぬってやった。

また、フトンもぬおうとしたけれど、針がなかったし、紙が不足して、生理のときは、赤い布

を使った等、さまざまな工夫をして生活した。

しかし、今考えてみると、この頃の方が、お互いに助けあい、励まし合い、団結し、協同して生活したのではないだろうか。

ないものを、お互にわかちあった経験が、誰にもある。

私たちは、今日、豊かな物資に囲まれてはいるが、その豊かになった分に反比例して、豊かな心をどこかに置き忘れてしまったのであろうか。

戦後と女性

昭和二十三年頃は、ことに大変な時期だった。

夜間の外出はしない、雨戸を早くしめるといったことが、行なわれ、貸家なども急速に増え、区内あたりから、米軍人相手の女性がたくさん入って来た。(前出、福生市の人口の推移参照)

これらの女性は、金銭的な優位さを、その行動にも表わす者もあった。多くの場合、関西弁を使っていたが、これも、自分の生まれをかくすためものではなかったのだろうか。

いずれにしても、外人が、自由に町内に入ってきた。そして、風俗習慣のちがう行動の様式で、生活することによって、外人と日本人の間にはいろいろの問題が起った。

今でこそ、キスする者は、TVなどでは、普通のこととなったが、庭先でそれを見たとき、ど

のようにそれを考えたらいいか、困った。

ただ、町は、経済的には、このために潤った。

派手なものがよく売れたし、品物も豊富だった。

子どもの教育

母親としては、子どもに食べさせることの次に子どもの教育が大変だった。

外人の兵隊が投げるチューインガムを拾う子どもたちの姿に、いいようのない恥ずかしさと、嘔りを感じ、子どもを叱ることもあった。

また、四、五歳の子が、「アメリカさんが、お嫁さんのおっぱい吸うの」といわれたとき、親として、困惑し、言葉もなかった。

こんな状況の中で、如何にして、子どもの関心をそらし、よい子を育てるかは、悩み多い課題だった。

先の見とおしもまだたらず、食べることに、着ることを考えつつも、我が子と、我が子のみならず他の子のことも考えつつ、子どもを育てる。その非常に強い母親の愛情をこの時代に育った子どもたちはどう受けとめているのであろうか。――後に詳しく述べるが、ほとんどこの頃のことを知らない、聞いていない子が意外に多い。時代の流れの中で忘れ去られたのか、伝えられな

ったのか。――

いずれにしろ、皆、熱心だった。給食のとき、燃しつけるものがなかったので、建築現場にもらいに行つたし、親が交替で給食をつくって子どもたちに食べさせた。

P・T・Aでも、子どもたちの問題は、とりあげたこともあったが、多くの人々が、米軍とのかかわりあいをもっていたため、正面からとり組むことはなかなかむずかしい面があった。

ところで、この混乱期に生まれた子どもたちは、今、ちょうど二十五歳から三十二歳位までで結婚適令期を迎えていたり、結婚して子どもを生んでいるところである。

早い人で、その子が小学枚の一年生位になっていたのであろうか。

私は、この頃、福生に生まれ育った女性に興味を持った。よくも悪くも、それらの女性は、福生が育ててきた人々である。

もちろん、都市化の進展は、福生という町を、市にしたように、福生だけでは論じきれない、多くの要素を持っている。しかし、もし市風、市の伝統といったものがあるのなら、それは、その人々に意識するしないにかかわらず、定着されていることであろう。それが、地域の文化というものであると考えられるからである。

接触し、話を聞いた範囲で、典型的と思われる二つのタイプを感じた。若干、明確にする意味でその二つのタイプを表現してみよう。

第一のタイプは、どちらかというところ、因習や規則に拘われやすく、義理人情や体面、家柄などに敏感なタイプである。

上下関係を重視し、大ぜいの前で発言をおそれるところがある。

日常生活は、勤勉、正直、まじめ、素直であるが、感傷的で消極的で自発性に欠ける。

どちらかというところ、禁欲主義的である。

また、政治や思想、対社会的問題には、無関心である者が多い。

このタイプとの話の中では、「福生には、あまり住みたくないが、親もとからあまり離れたくない」といったように、また、結婚に際して、家のつりあいといったものが、表現されるようにどちらかというところ、親との関係の中で、自分の行為を選択するようなどころが出されてくる。

一般的に、成長の過程で、大人になるということは、親から独立し、自分の価値感や行動力で生活していくようになることであるが（心理的離乳）——このことと親を愛し、大切にすることとは、別の問題である。——この部分が十分に行なわれていないように見える。

この子が生まれて幼児期を送った頃は、親の苦しみや悩み、食べていくことが最も大変な時期であった。しかしこの子たちには、その苦しさは、伝わっていない。

親が大変な時代をきたたから、逆にその子はそれらの苦しみから隔離されて育ち、どちらかというところ過保護になったのであろうか。

この意味では、非常に幸せな子どもであったといえるかもしれない。

性格的にも、女性らしく、優しく、明るく、和やかで、素直である。

現代の社会が持つ合理性の追求や、非人間的なあり方の中では、生きることとむしりとまどいがあるようなところさえみえる位にすばらしさを持つ人々ともいえよう。

ただ、現代っ子として、行動面では積極的であるようにみえながら、社会的な面では、自分から閉じこもりがちであり、みんな一緒に問題を解決していこうという姿勢よりも、自分だけの問題だ、と考えてしまうような狭さがあるし、福生という地域や文化や社会をどのようにしていこうかという発想よりも、自分の幸せを守ればという消極的姿勢が眼につくタイプである。

第二のタイプは、第一のタイプと反対で、既存の制度や価値に対立的であり、形式主義や権威主義への反発がある。

人間関係面では、人情よりも、ギブ・アンド・テイクの契約主義的であり、自己主張もするし、他人のことも気にしない。

どちらかといえば、現実に対する反抗的姿勢を持つことによって、自分の存在証明をしようとするかのようなものである。

日常生活では、解放的、積極的、消費的であって、行動や実感を中心において生活していく。能率や技術を重視し、合理的であり、計算高い。政治や思想や社会に対して、無関心をよそおったりしているが、現状に対して、一般的に反抗的である。

自分の行為のすべてを正当化することによって、生きていくようにみえる。

しかしながら、一見進歩的にみえ、生き生きしているようでありながら、どちらかというと、言うことや行動が、断片的で、統一性がなく、独特であるようでありながら、結局、他のまねのような型で生きていくようなところのあるタイプである。

もちろん、このようなタイプの子どもが、そのまま存在するわけではなく、実際には、その特徴をいろいろな重ね合わせた型で、さまざまな個性を持った素晴らしき「ふっさつ子」が生まれているとみることができよう。

しかし、一つだけ気になったことは、そのどちらのタイプにも共通して「ふっさつ子」という地域から、何かを得たという感覚をもっていないようにみえることである。それは、女性特有の、結婚によって、生活の場が変わることによるみ寄せられるのであろうか。

よくも悪くも、福生が育ててきた「ふっさつ子」は、福生という地域から隔絶されて育っているとしたら、それは、それを育てた大人社会が、福生の姿を、かくしてきた結果に外ならないのではないだろうか。

福生とは「何も無いところ」と、この子どもたちもまたいうところから、だから、新しい福生を創ろうというところへの橋渡しを、私たちの課題としてすえなければならぬであろう。

さらに、先ほどあげた二つのタイプは、確かに行動の仕方や態度のちがいはあるが、その本質をなす性格的な面では、環境条件を変化させようとする働きかけよりも、自分の中へ逃避する型を、共通して持っているようにもみえる。

また、みんなで協力し、連帯し、何かをするというよりも、自分の生き方を、一定の範囲内で守り、その中で一人で生きていくようなところがあるようにもみえる。

ただ、この世代の女性が、それよりも、もっと若い世代の女性とちがうと思われるところは、自分だけといっても、家族や身のまわりの人々との関係を、非常に大切に考えていることである。

自分とこれらの人々との関係を、簡単に断ち切ってしまうまいと、身のまわりの人々の深い愛情のもとに育ってきた自分が、表われているのかもしれない。

この世代の次の世代になると、自分と親との心理的關係を簡単に断ち切って、どちらかというところ、自分勝手に生きていくといった感じの生活になり、かなりちがうところが出てくる。前のタイプは他人へ迷惑をかけることがない。

したがって、ちょうど、戦後結婚した女性と、現代の若い十代の中間に位置するといえよう。

前述のようにこのタイプの女性もまた、「福生は、何も無いところ」といういい方をする。自分勝手に生きている。生きられる。生活していく上では困らない。だから、他人の迷惑のからないようにさえすれば、という感じで自分の殻にとじこもりがちである。

多くの方々のお話の中に、福生は、暮らしやすいところ——生きていくのに困らないところの意味で——だから、努力しなくても、一応生きていくことができるところである。

自然的には温暖で、災害のないところであって、心配のないところである。だから、子どもが何となしに生き、成長していつてしまうのではないか、という意見があった。

確かに、今日の状況と戦後の福生の状況とを考えあわせてみると、生活の面での大きなへだたりにあるにもかかわらず、戦後すぐの状況は、すでに昔話であって、そのことが、戦後生まれの世代には伝わっていないことに気づくし、福生という市の中で育ったこれらの子どもたちが、親の深い愛情のもとで育ってきていることもよくわかる。

ただし、そのような中で育った子どもたちが、「結婚したら福生を出たい」という希望もっていることはやはり気になるし、この意味で「福生」が意識の中になのか、または潜在的な反発があるのであろうか。

福生市の変化

ところで、福生に生き、生活してきた婦人たちは福生の変化をどのように感じとってきているのであろうか。

ここで、変化という意味は、単に人口が、九千人台から、五万人に近づこうとしているといった意味においてはではなく、人々の心といったもの、その背景に流れている価値判断——何が大切なものと考えられているのか——の基準といった意味である。

もちろん、このことを検討するためには、人間がものを判断するとき、何を基準にして選択するのか、とか、その人が、どのような生き方を大切なものとしているのか、とか、その社会が、どのような文化——社会的判断の基準——たとえば伝統をもつのか、とか、さらに、その社会とは、どのような社会であるのか、とか、いったさまざまな問題の検討が必要であらう。

しかし、ここでは、厳密に科学的にこの問題を検討することよりも、お話を伺った方々が、肌で感じとってきた感覚に即して、幾つかの「生き方のタイプ」を出しながら、それを、どのようにいわれた方が多いかによって、三十年の間の変化を追ってみたい。

(ここでは、もちろん、婦人が自分たちの感じをとらえるわけであるから、女性が対象であって、男性は含まれていない)

(一)変わったと思われる点に、金Ⅱ物を中心とした生き方から、美、社会、宗教といったものを考えるようになってきているという点があげられる。これは、シュプランガーという学者の類

型でいけば、 \wedge 経済人 \vee から \wedge 審美人 \vee または \wedge 社会人 \vee \wedge 宗教人 \vee への意識が強くなってきているということになるだろう。

戦後の経済成長とその反省の中で、金や物に対する考え方は、大きく変わってきた。金の多少による判断にかわって、美とか、宗教 \parallel 哲学とか、社会の中で果たす役割とかいったものが、重視されるようになってきている、といったことであろう。

(二)また、大きく変わってきているものに、慣例 \parallel 伝統や慣習によって判断する方法のかわりに、状況 \parallel 外部の人々の期待によって判断する方向や、自己の考え方によって決定をしていく方向が、強くなってきた。これは、リースマンという学者によれば、伝統志向から、他人志向型または、内部志向型へと意識が変わってきていることを意味するだろう。

(三)また、意識の上で変わってきている点として、社会的な各種の規制（拘束 \parallel たとえば、愛しあっても二人で一緒に歩けなかった）が強くなり、自分でそれを感じて自分を統制する（たとえば、どこかの誰れかという周囲の眼によって、自分のやりたいことをやらない）ことが、非常に弱くなった。

そして、他への依存（たとえば親）が強くなり、のんきにくらす、趣味にあつたくらしをいった、自己中心的または、感覚的な生き方が表に出てきた。このことは、過度の欲望をさげ、中庸を求めて生きるとか、人間の力の限界を知りつつ、高い理想を持ち、そこに向って自己にうちかかっていくといった生き方や、社会のために奉仕するといった生き方よりも、人生は楽しむために

あり、人生は、お祭りのようなものである。さらに人生は、快楽を熱狂的に追求することよりも、単純でたやすく手に入る快楽を享受していけばよいといった考え方に連がってきているのである。

これらは、モリスの分類によれば、 \wedge 中庸型 \vee や \wedge 克己型 \vee が少なくなり、 \wedge 安楽型 \vee や \wedge 享楽型 \vee が多くなってきたことを、示しているであろう。

ところで、このように感じられている意識の変化は、前に述べたように、第一に、性によって、大きなちがいがみえるのだろうか。何故なら、女性には、受容的であり、求めずしておのずからやってくるものとして受けとる意識が強いといわれるし、平均的なものを求めるところがあるといわれるのに対し、男性は、行動的であるといわれるからである。

また、年齢によって、価値意識は、大きく変化する。もちろん、それは、現われ方の濃淡であって、全体的には、その方向に変わりつつあるのであろうから、傾向としては、指摘することができるのであろう。

さて、このように、感覚的に感じられている意識の変化は、よい方向に向っていると評価できる側面もあるであろうし、また、問題があると思われる側面もあるであろう。

このように、戦後の変化を語ってくれた人々の間にも「歴史は、全体としては進歩の方向に、むいていくのだから、心配することはない」という意見と、「いや、誤ちの方向に向っている危

「陰性もある」という意見があつた。しかし、みんなに共通していたことは、我々一人一人が、充分に、自分を創り、勉強し、正しいものを毎日の行為の中で選んでいくこと（判断すること）が大切であり、そのためにはみんなで語り合い、話しあい、正しいもの（……と思われるもの）に向つて協力していくことだけは、どうしても、欠かせない方法ではないか、ということであつた。

あとがきにかえて

日頃、福生という市の中に住んで、福生の市民として生活していながら、ふだん、接触している方々の意識の変化のようなものを、整理してみようとする、非常に骨がおれることになつてしまいました。

工作上、関心のある領域ですが、いざ書こうとすると、なかなか書き上がらないのです。

わかっているようで、わからないでいる面の多さと、勉強不足を、嫌というほど思い知らされました。

最初にも書いたように、この辺を足がかりにして、さらにいろいろ教えていただくために入ふつさつ子✓用原稿用紙のマス目を埋めた感じがあります。失礼の段、資料提供して下さった皆様へのご期待に応えられなかつた点は、今後の勉強に免じてお許しただきたいと存じます。

いずれにしても、私たちは、福生という地域の中に住んでおり、地域の中で、そのもつ文化

Ⅱルールに規制され、その文化に含まれる、価値判断の仕方を、一つの基準にしながら自己を形成していきます。

孟母三遷の教えではありませんが、子どもは子どもなりに、大人は大人なりに、良くも悪くも地域の文化の影響を受けつつ、意識するしないにかかわらず、成長しています。（だ足ですが、それが地域社会の教育であり、広意味での社会教育の本質だと思います）

どのような人々が、地域に住み、どのような判断の基準によって、何を大切なものとしていくかは、今日の都市化された社会の中では、なかなか見えにくくなつてはいますが、それだけに、逆に大事になつてきているといえるでしょう。

ふつさつ子の良き伝統Ⅱ文化をまもりつつ、新しい福生を創造していくためにも、山崎さんのこのかけがえのないお仕事に、より以上の参加をしなくては、と思いつつ、筆をおくことにします。

（福生市教育委員会勤務）